

カトリック高幡教会の信者の皆様へ

主任司祭 ベロッテイ・ジャンルーカ神父
2021年8月15日（聖母の被昇天）

聖母の被昇天は神の喜び、私たちの希望

+ 主の平和！

皆様、聖母の被昇天の喜びを申し上げます。

ご存知のように、今年の聖母の被昇天のお祝いは、ちょうど主日すなわち日曜日にあたっています。またオリンピックとパラリンピックの間にもあたっています。

8月15日というこの日には、実に不思議と様々な記念が重なっています。カトリック教会のみならず日本の社会、また世界にとってもそうでしょう。例えば聖母のお祝いであるこの日は、お盆でもあります。日本宣教の保護者聖フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸した日もこの日ですし（1549年8月15日）、日米修好通商条約調印によって再び宣教師の上陸が許されたのもこの日です（1859年8月15日）。さらには太平洋戦争の終結も聖母の被昇天の祭日でした（1945年8月15日）。

教皇パウロ6世は、この祝日について次のように述べています。¹

8月15日の祭日は、マリアが栄光につつまれて天国へ上げられたことを祝います。この日は、いっさいをなし終えて満たされ、祝福に満ちあふれた彼女の生涯を飾る祭日であるとともに、汚れのない魂と処女を守り通した肉体の栄光をたたえ、さらにまた、復活したキリストに彼女が完全にあやかるものとなったことを祝う日です。それはまた、人類の究極的な願望の成就の姿とともに、それが達成可能のものであるという慰めに満ちた確証を、教会をはじめ全人類の目の前に提示する祭日でもあります。



¹ 『マリアーリス・クルトゥスー—聖母マリアへの信心』、6（1974年2月2日）より。

すなわち、彼女に見られるこの完全な栄光こそ、「子らと血肉をともに有した」(ヘブライ 2・14、ガラテヤ 4・4 参照)キリストによってご自分の兄弟とされたすべての人々がたどりゆく運命にほかなりません。被昇天の祭日の祝いは、天の元后聖マリアの記念日まで延長されています。これは被昇天の祭日の 8 日目〔8 月 22 日〕にあたっております。この記念日には、わたしたちは、万世の王の傍らに座り、女王として光り輝き、母として執り成しを行うマリアを黙想します。

カトリック伝承によりますと、この祝日は既に 6 世紀頃、「マリアの就眠の祭日」として記念されていたそうです。

天に上げられたことによって、聖マリアにおいて聖パウロのある言葉(テサロニケの教会手紙一)が完全に成就されたと思います。「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてください。」(5・23~24)

ご存知のように、プライドが高いと、すべての善行が損なわれ、祈りも空虚になり、神や人から遠ざかってしまいます。神さまが謙虚さを好むのは、私たちを卑下するためではありません。むしろ謙虚さは、私たちの空虚を満たす慈悲が経験できる、神に高められるための必要条件なのです。高慢な人の祈りは神の心に届かないことになります。一方(心の)貧しい人の祈りは謙虚さによって大きく聞き入れられることでしょう。神さまには弱点があります。それは、謙虚な人に対する弱さです。謙虚な心の前では、神さまは心を完全に開いてくださいます。いとこのエリサベトを訪問したとき、聖マリアは彼女に褒め称えられて神に向かって賛美の歌(ラテン語、「マニフィカト」)を歌いました。その歌によって、聖マリアはこの謙虚さを示しました:「主が、身分の低いはしたために、目を留めてくださって、(略)その憐れみは代々限りなく、主を畏れる者に及びます。」(ルカ 48~50——フランシスコ会訳聖書)

皆様、このような希望を持ってご一緒に祈り求めたいと思います。「わたしたちの母マリアよ、謙虚な心で祈ること、また生涯を送ることができるようお助けください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」